

書評

ダミアン・ミレー、エリック・トゥーサン 著 / 訳 大倉純子

『世界の貧困をなくすための50の質問―途上国の債務と私たち』

つげ書房新社 2006年

重 田 康 博

私は、1994年から1997年までの3年間イギリスのNGO「クリスチャン・エイド」の客員研究員として在籍した。当時クリスチャン・エイドは、プロテスタント系のNGOであったが、クリスチャンでない私を受け入れてくれた。その具体的活動は、パートナー団体を通して開発支援、緊急人道支援、開発教育、政策提言、市民キャンペーンであったが、特に”Who run’s the world?”(誰が世界を動かすの?)という2年間の市民キャンペーンを組織を挙げて大々的に取り組んでいた。このキャンペーンは、債務を返すことができないアフリカなど貧しい国々に対して世界銀行や国際通貨基金(IMF)が行う構造調整プログラム(SAPs)がいかに貧しい国の人々を苦しめているのか実情を知らせ、構造調整プログラムの撤廃および変革を求めることを目的としている。

このキャンペーンと同時に、クリスチャン・エイド内でアン・ペティフォード氏ら有力者によって「ジュビリー2000キャンペーン(債務帳消しキャンペーン)」が開始された。このキャンペーンは、アフリカなど貧しい国の多大な負担になっている債務を2000年までに全て帳消しにしようという運動であった。当初ジュビリー2000の事務局は、私が働いていたクリスチャン・エイド政策提言チームの部屋の隣を小さなオフィスを間借りし、専従スタッフ1人が働いていた。週に1回アン・ペティフォード氏が事務所を訪問し、代表としての実務をこなしていた。私はその事務所に来ていたボランティアとよく話をしたものだ。このように最初は小さな運動だったジュビリー2000は、1989年のバーミンガムG7サミット、1999年のケルンG7サミットを契機に急速に拡大し、世

界的規模の債務帳消しキャンペーンとなって、2000年の沖縄G7サミットを迎えた。日本でもNGO、キリスト教団体、労働団体によって1998年債務帳消しキャンペーンが開始され、福岡でも「ジュビリー福岡」(現在は「債務と貧困を考えるジュビリー九州」)が誕生し、2000年に福岡で開催されたG7蔵相会議ではジュビリー福岡は債務帳消しを求めてパレードを行った。私は当時福岡に来たばかりであったが、貧しい国の債務によって3秒に1人子どもが死んでいるというメッセージを伝えるために紙で作られた子ども用の西洋式棺を担いで福岡市内をパレードに参加した。

そのジュビリー福岡の当時の共同代表の1人だった大倉純子氏が訳したのが本書である。私は大倉氏にはジュビリー九州の運動を通じて知り合った。本書の著者であるダミアン・ミレー氏、エリック・トゥーサン氏は、「第三世界債務廃絶委員会(CAMTED)」という1990年ベルギーのブリュッセルで誕生した国際NGOネットワークの運動に参加し、途上国の貧困と債務帳消しを要求し、G8、多国籍企業、世界銀行、IMF、WTOの支配を終わらせることを目的にしている。

本書は、難解な債務問題を説明するために、地図、図表、グラフを駆使して50の質問にわかりやすく答えている。この本を読めば、途上国の債務問題の責任が、国際金融機関、先進国など新自由主義と企業主導のグローバリゼーションの支持者たちにあることがより明白になる。債務問題に関する書物が圧倒的に少ない中、大倉氏は、「債務問題に関して総括的かつ一般市民が読んでもわかる形でまとめた本が見当たらないし、多分これからも出そうにないことを考えて、あえてこのような暴挙(?)を冒すことにしました」と述べている通り、債務問題に関して徹底的に答えているのが本書である。

大倉氏は、昨年6月ご家族と共にアイルランドに移住されてしまったが、残された本書は日本の私たちに債務問題を見逃すな、忘れるなということを強く訴えかけている。